

まちあるきの考古学



関東大震災(大正12年)からの復興期、東京下町から新しい商店建築のスタイルが登場し、またたく間に関東一円に広まりました。

道路からは一見、西洋建築風。

一枚の板のような平らな正面壁に、様々な装飾をあしらったもので、古代ギリシャ風、イタリアンルネサンス風から、意味不明の一見洋風まで、様々なデザインのもが登場します。

しかし、裏にまわると、木造・瓦屋根の和風建築。まるで、正面に大きな看板を取付けたかのような建物でした。

建築学的には「紛いモノ」として、見向きもされなかった昭和初期の商店建築に光を当てたのが、1975年当時、東京大学大学院生だった藤森照信氏でした。「看板建築」の名づけ親です。

昭和4年、関東一円で看板建築が流行していた頃、石岡で大火が発生します。中心市街地の1/4、約1,700棟の建物を焼けつくした大火の後、旧水戸街道の中町通り沿いには、争うように看板建築が立ち並ぶようになりました。



「看板建築」考

道路などに面する建物の正面部分を、ファサード (façade) といいます。

看板建築とは、ファサードだけを銅板やモルタル、タイル、スレートなどの不燃素材で覆い、同時に装飾を施した商家のことです。

関東大震災後に東京下町に出現した看板建築は、耐火建築での再建、西洋化という時代の波、そして下町商人の粋と見栄、これらの混合生成物だといえます。

また、ファサードデザインが、ネオクラシズム風であったり、イタリアルネサンス風であったりと、あたかも本格的な西洋建築の如く振る舞っているものもあります。

西洋建築の正確な知識を持たない市井の職人が、日本在来の技法と材料を用い、西洋建築の様式や意匠を、つまみ食いのように模倣したものです。

石造や煉瓦造に見えても、じつはその殆どがモルタルで仕上げられています。まさに、左官職人がコテ一本で作上げた町並みだといえます。

看板建築のファサードは、「看板」の文字どおり、一枚のキャンバスに見立てられた、民衆の手による表現の場だったのかも知れません。



石岡の看板建築たち

1 平松理容店(昭和3年建築)

石岡の看板建築の先駆けです。一見すると、石造建築に見え、砂を固めた像のようにも見え。実は、木造モルタル仕上げで、表面は洗出し。洗出しは、家の外構造園で使われる工法ですが、それを外壁に応用し、きれいに仕上げるのは、高度な技術が必要です。

2 昭和5年頃建築の雑貨店

屋号を掲げたペディメント(正面上部の三角部分)やコリント様式風の柱頭飾りなど、ギリシャ神殿を思わせるデザインです。石造りのように見えますが、これもモルタル塗り。

3 看板建築2棟は瀟洒な洋風ファサード。店蔵も、黒漆喰塗りではなく、モルタル塗りだといいます。

4 これも看板建築の一種といってもいいかも。蔵の石造風ファサードもモルタル塗りだと思います。

5 平滑で広い壁面に左右対称に配した小さな窓。緑色の窓枠、上げ下げ窓、鋳物の花台、観音開きの木製雨戸など。何となくノスタルジックです。

